

## 中野先生を送る

著者	和田 四郎
雑誌名	神戸外大論叢
巻	53
号	3
ページ	1-4
発行年	2002-09-30
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1085/00001140/">http://id.nii.ac.jp/1085/00001140/</a>



# 中野先生を送る

和田 四郎

私事になるが、筆者と中野道雄先生は1970年に外大に着任した。六甲山麓の小高い丘は春の日差しが柔らかく、地獄坂は辞書の入った重たい鞆を抱えて登る学生達が列をなす、一見平和な楠ヶ丘であった。しかし、坂を上りきった正面にある白い階段には独特の書体の赤ペンキの落書きが残り、キャンパスに入ると立て看板やビラが目飛び込み、時折数名のヘルメット姿の学生達が笛を吹きながらデモ行進をしていた。あの全国を吹き荒れた大学紛争の残り火がまだ燻っていた時代でもあった。以来32年の長きに渡って研究、教育、大学・学科の運営等、大学生活のあらゆる面で先生から受けた恩恵をここで述べ尽くすことはとうていできない。まず先生には心から感謝の気持ちを捧げると同時に、自らの幸運を痛感する。

同じ助手とはいえ、無学・浅学のまま田舎を離れ、国際都市の明るさに当惑しつつも少しばかり浮かれていた私とは異なり、先生は沈着で決して多くを語らず、当時はむしろ近づきがたい厳しさすら感じられた。今思うとそれはこれから始まろうとしている学究生活の構想に思いをめぐらせ、それを実現しようという気迫に私が圧倒されていたからかもしれない。そして先生の足跡を振り返るとその構想は、私が言うのもおこがましい限りであるが、綿密なプログラム通り完璧に実現されたように思える。

先生が日英語対照研究を専門とされ、それが翻訳の研究であることは承知していた。しかし、先生のご研究の真の意味・意図と射程の広さを理解できるまで私にはかなりの時間が必要であった。翻訳論といえは名人技の競い合

いの「研究」がまず念頭に浮かぶ私には、先生が必ずと言っていいほどお書きになっている「(他人の) 翻訳の当不当を論ずるのではない」という趣旨の言葉が今ひとつ合点がゆかなかった。また先生は夙に対照研究には言語以外の因子を積極的に取り込むことの必要性も指摘されておられる。言語の対照比較研究に non-verbal な側面を入れるということも、今以上に散文的な当時の私にはなかなか理解しがたいことであつた。

しかし考えてみるまでもなくコミュニケーションは言語によってのみ行われるわけではなく、身振りや顔の表情など言語化されない手段(即ち記号)によっても行われ、場合によっては非言語的な要素が重要な意味を持つことも多い。言い換えると、コミュニケーションは言語をとりまく状況(即ち文化)の伝達であり、翻訳は二つの文化総体の相互変換である。先生は翻訳を単なる字句の置き換え技ではなく、文化を構成する記号総体の研究と位置づけられ、それがご研究の最大のテーマであつたと思われる。一例を挙げると「義理」という言葉。この言葉はそれ自体としては確かに「翻訳」はできない。しかし私になるほどと思ったのは、「義理」も状況によっては色々な意味用法があるということ、そしてその状況(即ち意味)は伝えることができるという柔軟な思考である。これは何の変哲もないことかもしれないが、記号論的な体系を視野に含めるか否かでその重みは全く異なるのである。先生のお書きになられたものを業績表に従って読み返してみると、先生がいかに綿密に構想を練られ、いかにそれを実現するに誠実であつたか改めてよく分かる。

その集大成となり、その後の博士論文の基礎となつたのは『翻訳を考える』(三省堂1994)ではなかつたかと思われる。いつもの先生の文章の通りこのご著書も分かりやすい言葉で書かれている。読みふけるうちに万葉集から吉本ばななまで日本文学についての幅の広さと造詣の深さに驚いている自分がいることにも気がつく。(私は隠れたベストセラーとでもいうべき『翻訳批評』を通して英語のみならず日本語の勉強を随分させられた。) ともかく

色々な読み方と楽しみ方のできる本である。ご自身でも事例のひとつひとつを楽しまれ、そして読み手も楽しませる、このような本は読んで楽しいものである。しかし先生のもう一つの狙いは翻訳をとりまく諸相に学問的な位置づけを与えることでもあった。この延長上にある論文「動作と行動の意味論—非言語伝達の研究—」に対して本学初めての論文博士号が授与されたのも当然であり、また外大としては最もふさわしいと思う。

六甲時代、外大の「く」の字型の研究棟を歩くと時々どこからともなく（とはいえ特定の研究室からであったが）「パチン、パチン」と軽快な乾燥した音と、「コツン、コツン」と静かなしかしよく響く音が聞こえてきた。将棋と囲碁である。教授会も店屋物を食べながら議論をする教授がいた、そんなのどかな時代であった。中野先生が将棋を始められたのはその頃であった。当時私は駒の動かし方に関しては先輩格であったので、グラウンドと六甲の山並みを仰ぎながらお相手をさせていただいた。しかし、対局を重ねることわずか数度で立場は逆転し、いつの間にか私の目は盤に釘付けになり、先生は窓の外に視線を向けられていた（そしてそれ以後はあまり先生から声がかからなくなった）。今思い返すと、あの急速な進歩は先生の学問に対する取り組み方と無縁ではなかった。大局観と正しい手筋は将棋の鉄則であるが、先生は、その鉄則を研究において日常的に実践されていたのである。学問を趣味とし、趣味を学問とされた粹な先生である。

特に移転して以来研究室には度々おじゃまし、色々ご指導を仰ぐ機会が多かった。先生の助言は時には厳しく筋を貫くものであったが、その背後には優しさが常に秘められていた。決して王手飛車取りなどという奇手、残酷な手を打たれることはなかったように思う。英米学科のカリキュラムの改革、それに伴う履修規程の整備、学科人事など大変な仕事もていねいに手順通りこなされた。学生には厳しい先生であったと仄聞する。しかし先生を慕う学生も多かった。最後の授業を先生は公開された。「厳しい」先生にもかかわらず受講生は多く、学生と先生との間の呼吸と雰囲気は絶妙であった。学生

には厳しくすることが真の優しさなのである。そのためには自身に対しても厳しくしなければならない。それが教育の（そして研究の）手筋であることを先生は身をもって示された。

そのような先生の表情がふっとゆるむ時がある。先生の研究室の窓辺にはかなり大きめのネコの置きものが机をはさんで向かい合わせに腰掛けています。何か不釣り合いであるだけに目立ち、本人（？）も大きな顔をしているが、それに時々視線を送られる先生の目は優しく、その置きものも何かを答えているかのようにであった。近年特に大学運営で厳しい局面が多かった。そのような時は静かに流れるジャズ（この造詣もかなりのものとお見受けした）に耳を傾けながらルームメイトと次の一手をお考えだったに違いない。また、時折書架に置かれた色紙にはその時々的心境をご趣味の句に綴られていた。ひょっとしたらその出来映えも相談されていたのかもしれない。

先生は退任のご挨拶の中で「授業は80点、学問は70点、行政は60点、平均70点」と「自己評価」された。誰が考えても控え目な数字である。しかし、これは先生の偽らざる率直なご感想ではなかろうか。大学人として先生は母校と後輩達に人生の8割の愛情と情熱を注がれた。学問が7割ということは全体像が先生の構想の中にすでにあるということでもある。これまでの先生の業績はまださらに大きな大局の手順通りの一手であった。次の手がどのようなものであるのか、知っているのは先生とあのネコの置きものだけである。

今年も英語学リレー講義がある。その中に中野先生のお名前がないのは寂しい。大きな穴が空いた印象を持つのは筆者一人ではないであろう。何よりも学生にとって大きな損失である。文字通り余人をもって代え難い言葉の文化人を外大は失った。